

北方圏

16 SUMMER
季刊 '85

HOPPOKEN

VOL. 52

特集 北海道の国際化を考える パートⅡ その現状

親善の大任果たした "サケ大使" / 先史北海道のベニバナの発見
北海道産業の座標を北方圏に...デンマークから眺めた北海道



See Page 76
ref. Ford



Northern Regions Center (NRC)
札幌 北方圏センター

発見のバニベ



カナダ・オンタリオ州
トロント大学教授
ゲリー・クロフォード

それはスーパーの粒餌の中にあった

豊富遺跡の炭化種子を追う

一九七六年八月の札幌のあの暑い夜、石附喜三男氏と私はスコッチをすすりながら、多事だった市立旭川郷土博物館への旅の疲れを癒やしていた。私たちが味わった挫折感を感じ、それは旅先の長い一日ではあった。さしあたり私たちにできたことと言え、その日の出来事の意義について深く考えることだけだった。私たちは、北海道北部で一九五〇年代に発掘された遺跡から出土した炭化種子のコレクションを調べたのだ。

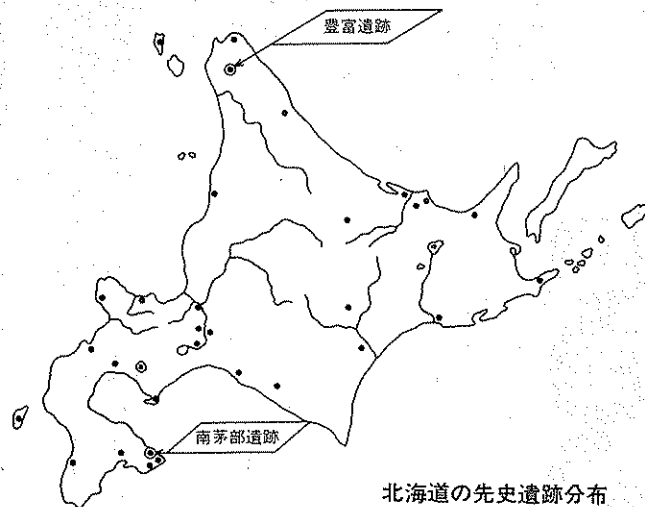
この豊富遺跡は紀元前約千年にさかのぼる。それらの中にはソバが含まれているはずだった。それは北海道におけるこの栽培植物に関して、恐らく最も良く、しかも最も古い証拠のほずである。

私たちが私のカメラの接写レンズの中に見たものは、全く私たちの期

待していたものではなかった。ソバの種子は三稜形である。それらはブナ（ミニチュア・ビーチ）の実に非常によく似ている。ソバの英語名（バクウィート）は、ブナの実のよう

なというドイツ語に由来する。レンズの中の種子は四稜形で、一方の端でわずかに曲がついており、種子のうちの数個はもう一方の端に小さな一つの軸を持っていた。四つの稜はそれぞれ稜線が少し上がつてから端まで下りていた。

私の経験では、これらがキク科（アスター・ファミリ）に属する植物の種子だと思ったが、それらが何であり得るかにについては全く分からなかった。私は石附氏に向かってそのことを言ったように記憶している。彼はそうは考えなかったようだった。博物館に収蔵しているものが何であ



北海道の先史遺跡分布

先史北海道の

国際協力で発掘の
南茅部町の遺跡

るのかを石附氏や博物館の職員に言えないことで私は悩んだ。その夜は新しい見解が出て来なかったことで石附氏も私も落胆してしまった。八年後、私はその日見たものが何であったのかを知るようになるのだが、しばらく後戻りしてみよう。ある遺跡から出土した炭化種子を見た場合、まず私は何をしようか。それに答えるため、私の調査研究について少し話してみたい。私は何を

してもまず考古学者である。考古学者として、私の調査研究は自分たちについて書くことがなかった人々の文化や生活様式をまとめることに向けられている。すなわち、彼らは先史時代の人々だったからである。カナダや日本での遺跡発掘や技術定住形態、年代決定、先史文化についてのその他の方面などに関する報告のほかに、人々が食べたものの遺物を調べたり、人々が住んでいた環境体系の特質や形式についての手がかりを考察することも貴重なことだと私は考える。考古学者が、住居の様式と、ある特定の遺跡の先史時代の居住者が残したゴミ捨て場の形跡だけしか得られない時、人々がどの程度まで狩猟をし、収穫をし、また農作物を利用していたのかを見定め

ることがいかに難しいことであるかを知って、人は驚くことだろう。

考古学者は遺跡からできるだけ多くの情報を新たに見いだそうとする。従って、きわめて多様な才知と関心が先史の問題に集中することになるのである。先史の遺跡から出土した炭化種子やその他の植物の断片を調査、同定、定量化することにより、私はその土地の環境条件の復元ばかりではなく、居住者の植物の採集・

南茅部の縄文遺跡にソバの種子

私が旭川郷土博物館の種子収集を調べるについては十分な理由があった。一九七四年、私は南茅部町にある五千一六千年前の縄文期の遺跡から遺物を収集していた。南茅部や日本全国の縄文人の生活様式についての十分な裏付け資料は、実際のところ、これまで全くない（世界中の多くの先史時代群がそうであるように）。その時私たちに、これら南茅部の縄文期の人々が本当に菜園を持っていたか否かを決めるに足る情報はほとんどなかった。

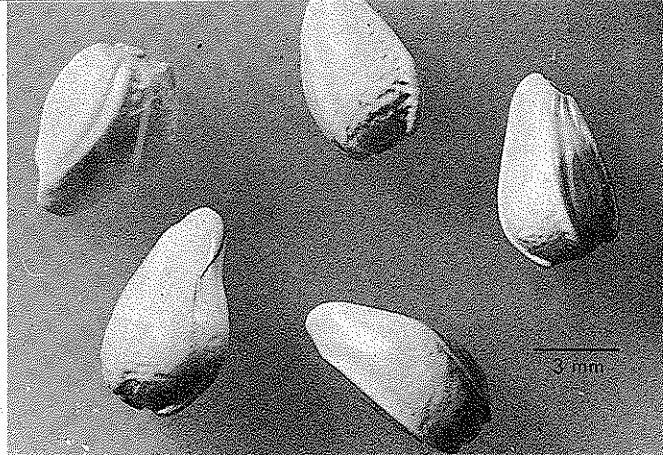
その年、縄文時代の住居址のひとつの床近くで出土した遺物の中に炭化したソバの種子が発見された。ソ

利用形態についても証拠を見いだすことができる。

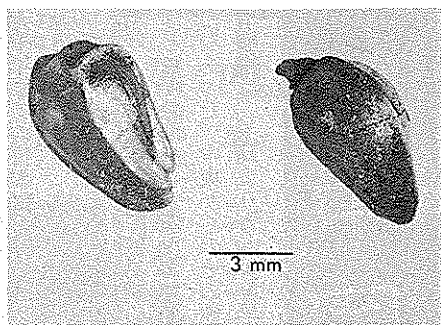
たいていの環境下では、炭化していない植物の遺物はあまり長く保存されることはないのだが、もし植物の断片が炭素に変われば、それらはほとんど永久的にその状態を保つことだろう。旭川郷土博物館の炭化種子は約千年前のもので、後にわれわれがアイヌとして知るようになる人々の住んでいた跡から発見された。

私は栽培植物であるから、私たちは北海道における古代作物の存在を示す最初の手がかりのひとつを得たわけである。それはたったひとつの標本だったため、その珍しさの故に、それは科学的観点からきわめて貴重なものであった。そのことのみならず、それはエジプト人がピラミッドを築き始める直前のころから堆積してきたものらしく、地中にあったために砕けていた。

私がその同定を行ったのは、私がノース・カロライナ大学の大学院生の時であった。私はソバに関して私



Modern benibana



Toyotomi benibana

本道栽培植物の最古の実例か

一九七六年のその日、車を旭川に走らせながら、石附氏もちょうど私と同様、例のソバを見ることに興味を持っていた。他の学者はかりでなく、彼にとってもまたそのソバの同定の正当性を疑う理由は何もなかった。北海道における栽培植物の最も古い実例であろうと思われる一般に報告されている標本が、長年の間にどのように変化していったかを見る良い機会だった。民族学者にとって、それは最初の北京原人を検分する機会を得るようなものだった。

つまり、収集物を見に博物館に出かけるなどというようなものではなかったのである。私と同様に民族植物学や植物史に興味を持っている人と少しの間話することができた。石附氏はアイヌ先史に関しては北海道で一流の学者でもあるので、カナダや合衆国では通常ほとんどできないような問題について話し合う良い機会だった。紀元千年までの間の北海道に関する英語の文献がきわめて少ないからである。私はその日、旭川でその種子を何

のような種子についての他の報告は見つからなかった。修士論文を終えると同時に、私は再び日本に行つてあの定義にくい縄文の栽培型植物について追跡調査をしようとした。私は北海道大学の吉崎昌一氏に私の調査結果を見せたら。同氏は北海道の擦文文化遺跡で発見された栽培型植物の種子について石附喜三男氏が書いた研究論文を見せてくれた。その報告書のひとつに豊富遺跡からのものがあつたが、そこではソバを含むいくつかの炭化種子が火事で焼けた先史時代の住居址の床近く

で見つかつていた。吉崎氏は、それらの種子が同じ遺跡から出土した豆類やキビ（ミレット）とともに旭川郷土博物館に収蔵されているという話を聞いていた。私は自分が発見したものと比較するため、また北海道で出土した考古学的ソバについて少々統計を取るため、その種子を見たいと思った。結果としてその擦文の種子が縄文の種子より何千年も新しいものだったとしても、それらは私たちが南芽部で収集したもの以上のものだったのである。

とか写真に収めることができたので、それを北大で現像、焼き付けた。私にはそのイメージを永久的に残しておく必要があつたのだ。その写真のうちの一枚はまだトロント大学の私の研究室の掲示板に張つてある。旭川にある私たちの頼みの綱を固定するため、継続的な調査研究を行うことを私は忘れたくないと思つた。私の同僚のだから以前にそれを見ているかも知れないという可能性はほんのわずかであつた。しかし、何年にもわたると、私はその問題の解決を見いだすことだんだん自信をなくしていった。私にとって、その問題を常に自分の身近に置くことは大切なことだったのである。

多くの科学者たちは、問題の解決が別の問題を手掛かり、あらゆる機会に常に気を配つたりすることに よつて、しばしば偶然に得られるものだと言つた。私は、事によると面白いことになりそうな一連の問題に答えがはつきりするまでは明確に系統立てて述べるというわけにはいかなかったが、一に対する不確かな答えだった。私は常々私の学生たちに、科学者というものは、答えを出してからそ

偶然の発見にしばしば偶然

の問題について明確に系統立てて述べなければならぬものだ、と言っている。それは、ノース・カロライナ大学で私の指導教授だったリチャ

ード・ヤーネル教授から学んだことである。その答えが明らかとなつた現在、それらの問題について、今、問うことが可能である。

一九八四年十二月、私は吉崎氏の招きにより、再び北海道での調査研究を行つていた。今度は北海道大学構内で、シャクシコトニ遺跡から出土したたくさんの植物の遺物の収集を調べていたのだが、その事それ自体はまた別の話である。

いに行つた。彼は、私たちがもう既に収集していた種子の袋をいくつか私に見せた。それから吉崎氏が取り上げた混合種子の包みが私の目にとまつた。粒餌（キビ、モロコシなど）の中にみられる一般的な種類の種子と混合されていたのは、長さが六七ミリの真つ白な種子だった。

その日は日曜日だったので、私たちは急いで仕事に取り掛かることもなかった。研究室には他にだれもいないはずがなかったからである。吉崎氏と私は近くのスーパーマーケットに買い物に出かけた。その日の前の数日間、私たちは大学の参考収集物として新しい種子を集めていたのだつたが、驚いたことには園芸品店ばかりでなく、ペット・ショップにまで種子が置いてあるのだ。

それを見た時、長い間行方かわからなかった友に、札幌駅でばったり出会つたという感じがした。私は信じられなかった。が、しかしそれがすなわち旭川にあったあの種子、がそこにあつたのだ。私たちはその包みを研究室に持ち帰つた。そしてしばらくの間食事をとるのも忘れた。包みの裏面には内容が記されてい

私たちは、そのマーケットのペット・コーナーを調べるために少し時間を取つた。私はあまり気乗りがしなかつたのだが、吉崎氏が通路を捜し始めたので、私も種子売場までつ

たーモロコシ、マイロ、エンドウマメ、オムギ、サフラワ。しばらく最後の名前が私には何なのかわからなかつた。しかしそのあと、それが英名「サフラワ」、すなわち日本名ベニバナをカタカナ書きしたもので

暑中御見舞い申し上げます

高玉建設工業株式会社
代表取締役

高玉 政治

別海町別海常盤町五番地

社会福祉法人 緑星の里
理事長

橋 浪 蔵

苫小牧市宇植苗二二の一

北見市公設地方卸売市場

北見魚菜卸売市場
株式会社

北見市東相内町三九番の一
〇一五七―三六―二二一

旭川スウェーデン交流センター
理事長

手取 貞 夫

札幌市中央区北一条西三丁目
経済センタービル
電話 二二二―三六八六

暑中御見舞い申し上げます

北海道町村会
会長

濱口 光輝

札幌市中央区北四条西六丁目
自治会館内

網走建設業協会
会長

島田 光

網走市南二条西三丁目

小樽建設協会
会長

佐々木 二 郎

小樽市花園二丁目十番二四号
電話 二四一―〇一五八

空知建設業協会

会長 中山 弘三
副会長 今村 一善

事務局長 角田 明 明
岩見沢市八条西三丁目

あることに気がついた。私たちは答えを得たのである。ベニバナは少なくとも千年以上も前に北海道に渡つて来た栽培植物と同一のものであつた。

ベニバナは確かにキク科に属する。キク科はゴボウ属(パードック)、アザミ属(シスル)、ヒレアザミ属などを含む小群(属)に分類される。これらが密接な関係を持つていることは、ベニバナの頭花を囲んでいるよ

土着の擦文人がベニバナ栽培

紀元前約三千五百年のエジプト人の墓からベニバナの種子が発見されている。この植物はエジプトでは主に皮革用の染料として使われた。紀元千年までの日本におけるベニバナはというところ。

まず、日本は紀元約六百年から七百年までには広域国際貿易網のひとつとしての役割をますます大きくしつつあつた。中東からのその他の栽培植物は、それよりももっと早くに日本に渡つて来ていた。これらの中には何千年も前から栽培化されていた大麦や小麦も含まれていた。

紀元前約二千年までにはこれらの中東の植物は中国に渡来し、それか

うなトゲのある葉から明らかである。植物学者はベニバナをカルタムス属ティンクトリウス種に分類している。私たちに可能な限りの植物学資料によれば、それは中東の植物である。密接な関連を持つ野生種が二種、現在トルコ、シリア、レバノンで生育しているのが確認されている。それらは同じカルタムス属であるが、異種のパーシカスとフラベセンスである。

さらに千五百年後には日本に渡つて来た。ベニバナが大麦や小麦と一緒に渡つて来た可能性もあるが、一連の栽培植物がある地域に同時に伝えられるということはまれである。異なつた使い道のある植物は独立して移動するようである。大麦と小麦は重要な食用穀類であるから、染料や油の原料であるベニバナとは違つたもののはずである。

今までのところ、北海道で出土したベニバナの種子が、この植物としては日本で唯一の考古学的証拠である。擦文期における北海道は南西日本にはもっと古くからベニバナがあ

つたはずである。その使い道に言及すれば、明らかに有史初期の日本にさかのぼることになる。

山崎アキラ氏は草木染めについての著書の中で、八世紀の飛鳥、奈良時代に一般的に行われていた方法を用いてベニバナから染料を取り出す方法を述べている。これは、紀元千年までには日本にこの植物が既に存在していたことを実証するのみならず、古代の南西日本においてそれが使われていたことについて示すものでもある。恐らく北海道で用いられた方法も同様だつたと思われる。花を太陽で乾燥させて花餅(フラワー・ケーキ)を作り、それを必要に応じて染料として使つた。種子は染料抽出工程には無関係である。

ベニバナが土着の擦文人によつて栽培されていたのではなく、北海道に持ち込まれて来たものであるとすれば、なぜ擦文の住居址において種子が発見されるのか訳がわからなくなつてくる。土着の人々が自分たち独自のベニバナを栽培していたからこそ、そこにその種子があつたのだらうと思われる。

現在では、その種子は栄養分のある調理用油としても役に立っており、インドでは照明用として使われてい

る。それはサフランから取れる黄色の染料の代用として使うことができる(英語ではその植物を時々「フォールス・サフラン(ニセサフラン)」と呼ぶ)。メキシコとインドが現在、ベニバナの主要生産国である。今、北海道においてもベニバナは生育可能であるが、それはむしろ温暖、乾燥地域を好む。北米では、主にカリフォルニアやアリゾナで栽培されているが、一方日本では、本州北部でまだよく見られる作物である。

南芽部の縄文遺跡から出土した初期のソバは、依然として、その種子としては日本で唯一の考古学的標本である。この栽培植物の他の標本を捜すことが思いがけない贈り物一つか不明の時期に、地中海を渡つて北海道にやつて来た染料と油の採れる植物ーを見いだす結果になつたのである。

吉崎氏も石附氏も私も、もはや豊富から出土したものの中にソバがなかった時のように失望してはいない。もちろん、私は古代北海道におけるソバに関して、もっと多くの証拠が得られることを依然として希望しているが、人類の先史の難題について、またひとつ解決が成されたことに満足していると思つてゐる。